

け、送りがな、かなづかい、くぎり符号などが正しく使われているか。

#### イ 修辞

語句の選択、叙述（たとえば、二つ以上の考えがはいっている文）、構成（たとえば、文と文の考えが一貫しない段落）などが適切であるか。

#### ウ 文法

主・述が一致しない文があるなど、文法上の誤りがないか。

また、作文が書けないという生徒の場合、次のような項目から具体的にとらえることができよう。

- ア 書こうとする必要を感じない。
- イ 書こうとする材料がさがせない。
- ウ 材料をまとめることができない。
- エ すじのとあった文章が書けない。
- オ 語句の使い方が適当でない。
- カ 文や段落の使い方が思うようにいかない。
- キ 必要な記号を適切に使うことができない。
- ク 読み手の反応を予想して書き方を調節することができない。

ケ 書いたことに対して推考する力がない。

#### ⑤ 聞くこと・話すこと

ア 聞くことでは、きちんと聞きとる技術

イ 話すことでは

- (ア) 正しく、明瞭な発音で話す力
- (イ) 問答における答え方
- (ウ) 意見、感想などの発表のしかた
- (エ) 話し合いのしかた
- (オ) 話し合いの司会のしかた などが挙げられる。

なお、「聞く・話す」は、「読む・書く」と表裏をなすものであるから、前述の項目、たとえば「読むこと」の文章理解力の(1)順序をおさえて読む力は、「順序をおさえて聞く力」とことばを入れ換えれば、「聞くこと」についての項目がより具体的にならう。「話すこと」についても同様である。

⑥ これまで領域別にとらえる主な項目を述べたが、大がかりなものはその簡単には実施できないのが実状であろう。そこで、これだけでもぜひ調査したいと思うものを挙げてみると、

ア 小学校で使用していた教科書で取り上げている教材、特に、童話・物語類。

イ 国語科のどういう点に興味があり、何がきらいであるか。

ウ 読書の状況、その好ききらい。

エ 読字力、書字力、朗読の程度。（ふだんの指導からつかむ）

オ 生徒の国語学習への希望。

#### ⑦ その他

ア 日記・作文

特別活動や道徳の時間等の記録から、生徒のかくれた面を見いだすこともできる。

イ 観察

観察者の主観によって、生徒の言動のとりあげ方が異なるであろうが、ぜひ活用したい方法である。

### 3. 高校国語科教師からみた新入生の実態

今年度、本センターで実施した高校国語講座の受講者（40名）に、「高校の立場からみて、新入生が特に劣っていると思われる内容」を答えてもらった。人数からいえば、統計資料として不十分ではあるが次に述べる。

まず、劣る内容として、1位が「書く」で38%、以下、「文法」「学習のしかた」が各17%、「読む」が15%、「聞く・話す」が13%となっている。その中の具体的内容の主なものを挙げると、

#### (1) 書くこと

- ① 誤字、あて字や筆順の乱れが目立つ。
- ② 短文もつづれない生徒がいる。

#### (2) 文法

- ① 主・述の関係、動詞と形容詞の区別がわからないなど、基礎的な力がない。

#### (3) 学習のしかた

- ① ノートのとり方、予習・復習のしかたが身につけていない。
- ② 何をどう学習してよいかわからない者が多い。

#### (4) 読むこと

- ① 音読・朗読ができない。

#### (5) 聞くこと・話すこと

- ① 話す力がない などとなっており、今後の指導に生かすべき点が多い。

### 4. おわりに

以上、生徒の実態をとらえるための一般的なことから国語科における領域別の主な項目と、ひとつの実態例を述べてみたわけであるが、生徒に関するデータの収集には限度があることは当然である。したがって、いくつかの資料に基づいて生徒個々に具体的目標を立てて指導し、理解の深まりに応じて指導を再検討するわけである。しかも、その目標を生徒各自に受容させ、意欲的に学習する構えを持たせなければならない。

ひとりの教師が、生徒ひとりひとりを最大限に生かす授業は多くの困難を伴うが、このような資料を生かした指導計画によって授業を進める時、その何分の一かは解消できるものと考えられる。